うし活 ～届け!! ぬくもり～

京都府立農芸高等学校 農業学科群　1年　田中 陽満莉

私の祖母は、喜寿になります。２回もの手術を行い、現在はほとんど家から出ることはありません。そんな祖母に私はSNSを使い、牛舎での出来事を伝えています。

「私の担当の牛ができてん。頑張って育てるわ!」。乳牛を任されたことが、とても嬉しくて、早速祖母にメールを送りました。「そうなん? 頑張って」。返ってきたメールは、とても素っ気ないものでした。家から出られなくても、新しいことに興味を持って欲しい。私が今感じていることを共有したい。そんな思いで送っているのに、伝わっていないようで、寂しい気持ちになりました。「ほとんどの人が牛を触ったこともないし、実際に見たことのない人だっているやろ? 牛がどんな動物かも、よくわからへんのと違うか? もっと具体的に伝えてみたらどうや?」と、先生に言われました。

「額のとこの模様が特徴的でかわいいねん」と写真付きでメールを送ったり、「子牛の哺乳って、首の高さや向きをちゃんと考えてやらないと、誤飲してむせたりするし、すごく難しいけど私のペースで哺乳するんじゃなくて、子牛のペースに合わせてあげるのが大事ってわかってん」、「今日、自分の手で初めて搾乳してん。乳頭の付け根を親指と人差し指で締め付けて、それから手と指全体で乳頭を締め付けて搾ったら、ビューと勢いよく出た! ミルクは牛の体温と同じで、すごく温かいんやで! 一生忘れられへんわ」、「ほんまは子牛が飲むミルクやねんなぁ。それを人間がいただいてるんやなぁ。そう思ったら、乳頭に触れるときドキドキしたわ」など、牛の様子に加えて私が感じたことや気付いたことをメールしていると、祖母の返信も次第に興味ある感じに変わってきました。

ある日、「和牛の子牛が出荷されてん。子牛せり市で買われた後も、1年くらいは大きくするために飼育されるんやって」とメールすると、祖母から、「その子牛の残り1年間に、いっぱい楽しいことがあるといいね」と返信がありました。その返信を見て、お肉になるために生まれてきた牛にも「命」があって、生きているんだと改めて思いました。人間からすると短い生涯の家畜だけど、人間と同じように、楽しい時間をたくさん味わって欲しいと思いました。そして、そのような時間を作るのは、私たち酪農に携わる者なんだと思いました。

私が初めて牛に触れたのは、この４月に京都府立農芸高等学校に入学し、畜産部に入部した日でした。白と黒の模様の大きな搾乳牛にそっと近づき、長い首に「ぎゅっと」しがみつきました。柔らかくて温かくて、とても気持ちよくて、しばらくの間そうしていたにも関わらず、その搾乳牛はじっとしてくれていました。「あぁ、なんやろ。この安心できる感じ」。私が抱きついているのに、包み込まれているような感覚に陥りました。新しい環境に、片道２時間を超える通学。多くの先生方のオリエンテーションに、たくさんの行事。自分では気付いて

いなかったけど、かなり緊張した日々を送っていたのだと思います。そこで牛に触れ、牛の温かさや優しさが私に安心感を与えてくれたのだと思います。その日の帰り道で「あのぬくもりを、ばぁばにも感じて欲しいな」と考え、祖母にメールを送ったのが、始まりでした。

最近では「陽満莉が担当している子牛の様子を教えて！」や「陽満莉はそのうち、牛と話ができるようになるな」など、実際に牛を見てもいない祖母が、牛や私に興味を持ってくれているメールが届きます。私は、とても嬉しいです。「実際に見ても触れてもいないのに、人を元気にする牛ってすごいな」と、牛の管理作業をしながら思いました。ＳＮＳでは動物の動画がよく取り上げられ、その動画にはたくさんの「いいね」が付きます。動物たちのかわいらしい様子に、とてもほっこりした気分になったり、笑ったり、驚かされたりします。また、心配になったり、頑張れ頑張れと励ましたり、あぁ良かったと胸を撫で下ろすような動画もあります。実際に見ていなくても触れていなくても、人の心を動かす力が動物にはあるのだと思います。ほとんど家から出ることの出来ない祖母が、牛情報のメールで少し前向きに元気になれたように、外出が困難な方でも、牛たちの状況や私たちの日々の管理などを私たちが発信することで、「今日、あの牛は元気にしているかな？」、「あの牛は大きくなったかな？」、「あの牛のここがかわいいから好き」などと思ってもらえるようになったらいいなと思いました。

同時に、私は牛たちから与えてもらっているばかりだとも思いました。私はまだ、先生や先輩が言われたことをこなすのが精一杯です。最初は「牛を見て名号がわかるようになりなさい」と言われても、私には白と黒の模様の牛にしか見えませんでした。朝、昼、放課後と牛舎に通い続け、牛にも顔や模様・体型そして行動の違いなどがあることに気づきました。世界の国名を暗記するのは苦手ですが、牛の模様はすっと入り込んできました。次第に、牛を見て名号が識別できるようになり、糞便の状態で健康状況をチェックできるようになり、発情兆候に気付けるようになりました。しかし、まだまだです。牛が発信しているシグナルはそれだけではないからです。牛の息遣い、目の輝き、毛の艶、行動の変化。様々なところから発信しているシグナルをキャッチできるようにならなければなりません。「子牛のときからしっかり管理をしないといけない。牛は育成が全て」と先生はおっしゃいます。観察スキルをもっともっと向上させなければ、立派な搾乳牛に育て上げることもできません。牛たちに安心して暮らしてもらうなんて、夢のまた夢になってしまいます。日々の管理作業を確実にできるようになること。細やかな観察力を身に付けること。それが今の私がやるべきことだと思っています。そして牛について、もっと知りたいと考えています。牛自体について、餌について、牛舎について、ミルクについて。家畜を取り巻く環境は様々な要因から成り立っているように思えるからです。牛のことをよく知らないと、牛がどういうときに居心地がいいと感じているのか、楽しいと感じているのかもわからないままです。これから多くのことに興味を持ち、様々なことを経験し、いろんな人からたくさんのことを吸収していきたいです。そして、自信と誇りを

持って、牛に関わることができるようになりたいです。

牛たちは、肉やミルクを私たちに提供してくれます。また存在そのもので、私たちに安らぎや愛情を提供してくれます。私は、酪農に携わる者として、質の高い畜産物を提供できる家畜を飼育することはもちろん、牛たちが楽しいと思える生涯を過ごせるような酪農がやりたいです。そして、牛からもらう愛情を、少しでも多くの人にお裾分けできるように考えていきたい。牛から愛情をもらう分、責任と愛情を持って接することができるように、しっかりと勉強をしていきます。